

「教会と社会」研究会（ES研）例会（2014. 4.26（土）於・早稲田大学戸山キャンパス）

## 9世紀ビザンツの皇帝・教会・修道院——「姦通論争」を事例として——

### 〈報告要旨〉

早稲田大学大学院博士課程1年 甚野ゼミ 岸田菜摘

#### 1. はじめに

報告者は現在まで八、九世紀のビザンツ教会史を研究の対象としている。七世紀後半から九世紀にかけては、ビザンツ世界が「古代」から「中世」へと変化する転換点であると捉えられているが、そのなかでも八世紀から九世紀前半にかけて発生した「聖画像破壊論争」（イコノクラスム）は特にビザンツ宗教史上の最重要な論点のひとつとして扱われ、歴史学のみならず美術史等の分野においても膨大な先行研究が蓄積されている。しかし他方では、イコン擁護派が残した史料しか残されていないことなどから、未解明の部分も多い。

従来の研究ではイコノクラスムとは、ビザンツ帝国においてイコン（聖画像）の是非を巡って正統信仰と東方的・イスラム的思想が対立した事件であり、帝国社会の分裂と混乱を引き起こしたとされていた。しかし近年の研究では、むしろイコン崇敬禁止を定めたとされているレオン三世の時代からビザンツ帝国は混乱期を脱し、またかつて指摘されていた修道士層への殊更の迫害も否定する意見が多く、イコノクラスムの全体像については多くの面で見直しが迫られている。また八 - 九世紀のビザンツ史は必要以上にイコノクラスムを「伝説化」して取り上げる傾向があるが、この時代の出来事に関してはより長期の時代背景の中でその意義を再検討する必要がある。

報告者は、修士論文では「ストゥディオスのテオドロスと「姦通論争」——八世紀末のビザンツ皇帝と正教会」という題目で、795年から811年にかけてビザンツ国内で発生した「姦通論争」を取り上げ、論争の中で発言されたストゥディオス修道院長テオドロスのビザンツ皇帝と教会の関係を巡る言説から、八 - 九世紀のビザンツ教会史における皇帝と正教会の関係を考察した。

#### 2. 研究史および研究上の問題点

1948年にF. Dvornikが「姦通論争」を、続く九世紀後半の教会論争の先駆的現象として評価して以来、「姦通論争」は修道士達を主体にした「厳格派」集団による、皇帝の干渉からの教会の独立を求めた運動として評価されてきた。しかし近年ではその前提とされたビザンツ皇帝と教会の関係を形容した「皇帝教皇主義」そのものが否定され、また1978年にP. Speckが論争の当事者であるストゥディオス修道院長テオドロスを教会政治家として見直して以降、「姦通論争」は修道士層全体ではなくテオドロス個人を中心とした政治運動として評価されるようになった。しかし問題点としては、教会政治家として評価されるテオドロスの活動と思想を総合的に捉えた視点からの研究が不足していること、また、より長

期的な教会史のなかで「姦通論争」を評価する必要があることが挙げられる。報告者は修士論文ではテオドロスの書簡から彼の言説を分析し、その思想と行動を同時に捉えることを試みた。

### 3. 姦通論争

姦通論争の発端は、皇帝コンスタンティノス六世が妻アムニアのマリアと離婚し、女官テオドテとの再婚を試みたことである。その背景には皇帝とその母エイレーネーの反目があった。総主教タラシオスは皇帝の再婚を黙認したが、自らは婚礼に参加せず、部下である聖ソフィア大聖堂の執事カタラのヨセフに皇帝夫妻の祝福を委ねた。テオドテとは血縁関係にあったテオドロスや叔父のプラトンたちはそれに抗議し、カタラのヨセフを主な対象として非難を始めた。皇帝はテオドロスたちとの交渉に失敗すると、彼らをテッサロニケへと追放した。しかし 797 年のクーデターでエイレーネーが単独皇帝に即位すると、テオドロスたちは追放を解かれて彼らの主張が認められ、カタラのヨセフは失脚した。

しかし 806 年、皇帝ニケフォロス一世がカタラのヨセフを司祭に復帰させると、姦通論争は再燃する。テオドロスは 808 年までは批判を控えていたが、808 年頃からカタラのヨセフを批判し、皇帝や総主教に宛てた書簡で自らの立場を正当化しようと試みている。そして 808 年末にテオドロスの弟ヨセフが皇帝や総主教とのミサへの同席を拒んだことを理由に罷免され、テオドロスたちはストゥディオス修道院で兵士たちに逮捕され、809 年初めの教会会議で破門と追放が言い渡された。

811 年に皇帝ミカエル 1 世によって呼び戻されるまでの 2 年間、はじめてテオドロスは追放先で皇帝に対して直接非難を加えた。古来、ビザンツ皇帝は法を超越した存在であるという思想が存在したが、それに対してテオドロスは皇帝もまた教会法に服すべき存在であると主張し、むしろ臣下に範を見せるために皇帝こそ率先して法を守るべきであるとした。このような考えはテオドロス独自の思想ではなく、むしろ八 - 九世紀に特徴的な思想の変化の表れと捉えることが出来る。

### 4. 結論

以上姦通論争の経緯とテオドロスの主張を整理したが、ここからテオドロスが皇帝を直接非難したのが 809 年から 811 年までの 2 年間だけであったことが分かる。テオドロスはカタラのヨセフだけを非難することによって、皇帝や総主教との直接的な対立を避けようとしていた。したがってテオドロスは、かつて言われていたように皇帝権からの教会の独立を企図していたわけではないと言える。むしろテオドロスはビザンツ皇帝に対して伝統的な宗教的役割を認め、なおかつ教会法を臣下に率先して守らせる「法の守護者」としての役割を期待していた。

本研究では「姦通論争」におけるコンスタンティノープル総主教の役割を十分に論じることが出来なかった。しかし、総主教座の展開および総主教とテオドロスをはじめとするストゥディオス修道士たちとの対立は、八世紀末から九世紀にかけてのビザンツ教会史のなかできわめて重要な問題のひとつと考えられる。今後の研究ではイコノクラスムが終結した 843 年以降、特に 860 年代のフォティオスのシスマの問題も視野に入れて考察を深めていきたい。

## 参考文献

### 史料

#### (1)ストゥディオスのテオドロス関連の史料

Theodori Studiae Epistulae (Corpus Fontium Historiae Byzantinae 31/1 – 2) Series Berolinensis , ed. G. Fatouros , Berlin and New York , 1992.

Parva Catechesis , ed. E. Auvray, Theodori Studitis Parva Catechesis. Paris, 1891.(Thesaurus Linguae Graecae <http://www.tlg.uci.edu.ez.wul.waseda.ac.jp/>で 2012/12/29 に閲覧)

Μεγάλη κατήχησις , ed. A. Papadopoulos-Kerameus, Theodoros Studites, St. Petersburg: Kirschbaum, 1904. (Thesaurus Linguae Graecae <http://www.tlg.uci.edu.ez.wul.waseda.ac.jp/>で 2012/12/29 に閲覧)

Laudatio Sancti Platonis Hegumeni , in Patrologiae cursus completus. Series Graeca vol. 99 , 884 – 849.

Sermones Catecheseos Magnae , ed. J. Cozza-Luzi, Nova Patrum Bibliotheca 9/2 (Cat. 1-77), 10/1 (Cat. 78-111), Rome: Bibliotheca Vaticana et Typi Vaticani, 1888-1905: 1-217 (Cat. 1-77), 7-151 (Cat. 78-111).(Thesaurus Linguae Graecae <http://www.tlg.uci.edu.ez.wul.waseda.ac.jp/>で 2013/1/5 に閲覧)

Vita et conversatio sancti patris nostri et confessoris Theodori abbatis monasterii Studii a Michaele Monacho conscripta , ed. A.Mai , in ; Patrologiae cursus completus Series Graeca vol. 99 , 233 – 328.

#### (2)ストゥディオスのテオドロスの著作以外の史料

Corpus iuris civilis , ed. W. Kroll et al. , Berlin , 1954 – 1963 (repr. 1989 – 1993).

Gelasius I , Epistola VIII. ad Anastasium Imperatorem , (Patrologia Latina Database <http://pld.chadwyck.co.uk.ez.wul.waseda.ac.jp/> で 2013/1/4 に閲覧) .

Photius Bibliothèque , ed. R. Henry , Collection Byzantine 4 , Paris , 1965.

Sacrorum conciliorum, nova et amplissima collectio , I.D. Mansi (ed.) , 53vols. , Paris and Leipzig , 1901 – 27.

The Life of the Patriarch Tarasios , by Ignatios the Deacon ; introduction, text, translation, and commentary, ed. Stephanos Efthymiadis , 1998.

Theophanes Confessor , Theophanis chronographia , (ed.)C. de Boor , vol. 1. Leipzig , 1883 (repr.

Hildesheim: Olms, 1963) (Thesaurus Linguae Graecae (<http://www.tlg.uci.edu/ez.wul.waseda.ac.jp/>)  
で 2012/12/20 に閲覧)

The Synodicon Vetus / text, translation, and notes , eds. John Duffy and John Parker , (Dumbarton  
Oaks Texts 5) , New York , 1979.

Ecloga. Das Gesetzbuch Leons III. und Konstantinos' V , L. Burgmann (Forschungen zur  
Byzantinischen Rechtsgeschichte Band 10) , Frankfurt am Main , 1983 , proem , section  
1.(Thesaurus Linguae Graecae で 2013/1/4 に閲覧)

## 欧文文献

D.E. Afinogenov, “Κωνσταντινούπολις ἐπίσκοπον ἔχει: The Rise of Patriarchal Power in Byzantium  
from Nicaenum II to Epanagoga,” *Erytheia* 15(1994), pp.45 – 65; 17 (1996), pp.43 – 71.

P. J. Alexander , The Patriarch Nicephoros of Constantinople , Oxford , 1958.

—, “Religious Persecution and Resistance in the Byzantine Empire of the Eighth and Ninth  
Centuries: Methods and Justifications,” *Speculum* 52 , 1977, pp. 238 – 64.

H. G. Beck , *Kirche und theologische Literatur im byzantinischen Reich* (handbuch der  
Altertumswissenschaft, 12: 2.I) , München , 1959.

L. Brubaker and J. Haldon , *Byzantium in the Iconoclast Era, c. 680-850 : A History* , Cambridge ,  
2011.

A. Cameron , “Images of Authority : Elites and Icons in Late Sixth-Century Byzantium,” *Past &  
Present* 84 , pp. 5 – 35.

P. Caranis , “The Monk as an Element of Byzantine Society,” *Dumbarton Oaks Papers* 25 (1974)  
pp. 61-84.

R. Chohij , *Theodore the Stoudite : the Ordering of Holiness*, Oxford , 2002.

G. Dagron , *Emperor and Priest: the imperial office in Byzantium*, trans. J. Birell. Cambridge , 2003 ,  
(rev. ed. by Dagron, 1996).

F. Dvornik , *The Photian Schism: History and Legend*, London,1948, repr.1970.

—, “Emperors, Popes, and General Councils,” *Dumbarton Oaks Papers* 6 , 1951, pp.3-23.

—, “The Patriarch Photius and Iconoclasm,” *Dumbarton Oaks Papers* 7, 1953, pp.67 – 98.

—, *Early Christian and Byzantine Political Philosophy : Origins and Background* , Dumbarton  
Oaks Studies 9 , 2 vols. , Washington D. C. , 1966.

—, *Photian and Byzantine Ecclesiastical Studies*, London , 1974.

A. J. Ekonomou, *Byzantine Rome and the Greek Popes: Eastern influences on Rome and the papacy  
from Gregory the Great to Zacharias, A.D. 590–752*, Lanham , 2007.

C. Frazee , “St. Theodore of Stoudios and Ninth-Century Monasticism in Constantinople,” *Studia  
Monastica* 23 (1981) , 26 – 58.

P. Henry , “The Moechian Controversy and the Constantinopolitan Synod of January A. D. 809,”

- Journal of Theological Studies* 20 , 1969 , 495 – 522.
- P. Hatlie , *The Monks and Monasteries of Constantinople ,ca.350-850* , Cambridge , 2007.
- J. Herrin , *Margins and Metropolis: Authority across the Byzantine Empire*, Princeton, 2013.
- J. M. Hussey , *The Orthodox Church in the Byzantine Empire* , Oxford , 1986.
- P. Karlin-Hayter , “A Byzantine Politician Monk : Saint Theodore Studite”, *Jahrbuch der österreichischen Byzantinistik* 44 , 1994 , pp. 217 – 232.
- A. P. Kazhdan and G. Constable , *People and Power in Byzantium* , Washington D. C. , 1982.
- A. E. Laiou and D. Simon (eds. ) , *Law and Society in Byzantium : Ninth – Twelfth Centuries* , Washington D. C. , 1994.
- J. Leroy , “La réforme Studite,” *Il Monachesimo Orientale* (Orientalia Christiana Analecta 153), Rome , 1958 , pp.181 – 221.
- R. J. Lilie , *Byzanz unter Eirene und Konstantin VI.(780-802) mit einem Kapitel über Leon IV von Ilse Roschow* (BBS, 2) , Frankfurt am Main , 1996.
- R. J. Lilie and F. Winkelmann et al. (eds.), *Prosopographie der mittelbyzantinischen Zeit : herausgegeben von der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften* , Bd.6 , Berlin , 1998 – 2002.
- A. Louth, *Greek East and Latin West: The Church AD 681 – 1071*, New York, 2007.
- J.A. McGuckin , *The Orthodox Church : An Introduction to its History, Doctrine, and Spiritual Culture* , London , 2008.
- J. Meyendorff , “Christian Marriage in Byzantium : The Canonical and Liturgical Tradition ,” *Dumbarton Oaks Papers* 44 , 1990 , pp. 99 – 107.
- , “Justinian , the Empire and the Church,” *Dumbarton Oaks Papers* 22 , 1968 , pp. 43 – 60.
- R. Morris , *Monks and Laymen in Byzantium , 843-1118* , Cambridge, 1995.
- P. E. Niasis , *The reign of the Byzantine emperor Nicephorus I (A. D. 802 – 811)* , Athens , 1987.
- D. Obolensky, *The Byzantine Commonwealth: Eastern Europe 500-1453*, London, 1971.
- The Oxford Dictionary of Byzantium* (3 vols.), A.P.Kazhdan /A.-M.Talbot(eds.) , New York and Oxford , 1991.
- O. Panaite , “The Dogmatic and Martyrly Conscience of the Church in the Political Philosophy of Early Christianity,” *European Journal of Science and Theology* 8/2 , pp. 311 – 327.
- T. Pratsch , *Theodoros Studites(759 – 826) - zwischen Dogma und Pragma* (BBS , 4) , Frankfurt am Main , 1998.
- W. Treadgold , *The Byzantine Revival* , Stanford , 1988.
- A. P. Vlasto, *The Entry of the Slavs into Christendom*, Cambridge, 1970.

#### 邦語文献

井上浩一 『ビザンツ帝国』 岩波書店、1982年。

- G.オストロゴルスキー『ビザンツ帝国史』和田廣訳、恒文社、2001年。
- 大森正樹「ビザンツの修道制」上智大学中世思想研究所編『中世の修道制』（中世研究 8）未来社、1991年、19-39頁。
- 都甲裕文「都市コンスタンティノーブルの修道制--一〇世紀のストゥディオス修道院を中心に」『キリスト教史学』63、2009年、131 - 147頁。
- 小林功「ニケフォロス1世の対スクラヴィニア移住政策——9世紀初頭のビザンツ帝国、バルカン半島、地中海」『西洋史学』181、1996年、1-16頁。
- 中谷功治「テマ反乱とビザンツ帝国--「テマ=システム」の展開」『西洋史学』144、1986年、242-260頁。
- 、「イコノクラスムの時代について——八世紀のビザンツ」『待兼山論叢（史学篇）』26、1992年、63-87頁。
- 、「八世紀後半のビザンツ帝国——エイレーネー政権の性格をめぐって——」『西洋史学』174、1994年、36-53頁。
- 、「ストゥディオスのテオドロスと「姦通論争」（795-811年）」『西洋史学』186、1997年、1-19頁。
- 、「ビザンツ帝国のバルカン半島政策（8世紀後半—9世紀初頭）--ニケフォロス1世の戦死を考える—」『愛媛大学教育学部紀要』第II部、人文・社会科学 32(1)、1999年、15-39頁。